金鳳釵記

田中貢太郎

崔興哥（さいこうか）は春風楼を目的（めあて）にして来た。そこには彼の往こうとしている呉防禦（ごぼうぎょ）という富豪の家があった。少年の時、父に伴われて宣徳府（せんとくふ）へ行ったきりで、十五年間一回もこの揚州へ帰ったことのない興哥は、故郷とはいえ未知の土地へ来たと同じであった。彼は人に訊き訊きして、もう陽の落ちる頃、やっと呉防禦の家へ著いた。

表門を入って中門の前へ往ったところで、下男が門を締めようとしていた。興哥は手をあげて下男を招いた。

「わしは、旅から帰ってきた興哥じゃ、旦那様にお眼

にかかりたいから、取次いでくれないか」

下男は不審そうに興哥の風采をじろじろ見てから入って往った。興哥はそこへ立って黄色に夕映した西の空を見ていた。

下男が急ぎ足で引返してきた。その下男は初めの態度と打って変って恭（うやうや）しくなっていた。

「旦那様が大喜びでございます、さあ、早くお入りくださいますように」

興哥は入って往った。そのまわりの庭の容（さま）に見覚えがあるような気がした。室（へや）の中へ入ると防禦が出てきて立っていた。

「おお、興哥さんか、暫く逢わない間に、立派な男になった、さあ、おあがり、話したいことが山のようにある」

興哥はほんとうの父親に逢ったように涙ぐましい心地になって、ちょっと挨拶をしながら防禦に随いて往った。次の室には明るい燈があった。二人はその燈を中にして向きあった。

「今、何か御馳走が出来るが、それまで話をしよう、お父さんもお母さんも、皆御無事だろう」

防禦は心持ちよさそうに顔をにこにこさして言った。

興哥は淋しそうな顔を見せた。

「実は、その父も、母も、歿(な)くなりまして」

「なに、お父さんも、お母さんも歿くなった」

防禦は眼を瞠(みは)った。

「そうです、父は宣徳府の理官を勤めておりましたが、三年前に歿くなりました、母の方は、父よりも二三年前に歿くなりました」

「そうか、それは知らなかった、それでは、どこもかしこも不幸だらけじゃ、しかし、よく帰ってきてくれた、力を落してはいかんよ」

「いや、もう私も諦めております」

「そうじゃ、諦めなくちゃいかん、諦めるに就いては、

まだ一つ諦めて貰わなければならないことがある」

「え」

興哥は防禦の顔を見た。防禦の眼は曇っていた。

「あんたと許嫁（いいなずけ）になっていた興娘（こうじょう）も、病気でなくなったのじゃ」

「え、興娘さんが」

驚きに見ひらいた興哥の眼が悲しそうになった。

「あんたには気のどくだが、しかたがないことじゃ、諦めておくれ、半年ほど患ってて、二ケ月前に歿くなったのじゃ、あんたの処から許嫁の証に貰っていた鳳凰の釵（かんざし）は、あれは棺の中へ入れてやった。長い間あん

たの方から便りがないものだから、妻（かない）は嫁入りの時期を失うから、他から婿を取ると言ったが、わしは、あんたのお父さんと約束があるから、それには耳を傾けなかった、あれもまた決して、他へ往こうとせずに、あんたのことを言い言い死んで往ったのじゃ、あれは十九じゃ」

防禦の声はかすれて聞えた。興哥はもう泣いていた。

「申しわけがありません、父なり私なりが、早く迎えにあがるはずでしたが、母が歿くなりましたので、その喪でも明けたらと思っておりますと、また父が歿くなりましたので、またまた喪に籠りまして、喪が明け

るなり急いで参りましたが、申しわけがありません」

「いや、こうなるのも運命じゃ、しかし、あれは歿くなっても、わしはやっぱりあんたの婦翁（しゅうと）じゃ、いつまでも助けあって暮そう、それにあんたも、もうお父さんもお母さんもないから、わしの家にいるがいい」

「はい」

「では、あれの位牌に、あんたの帰ったことを知らしてやろう」

そこへ興娘の母親が出てきた。三人は打ち連れて興娘の位牌を置いてある室へ往って、その前で楮銭（ちょせん）を焚いたが、三人の眼には新しい涙が湧いていた。

興哥は防禦の家に止まることになり、自分の室にあてがわれた門の側の小斎へ入った。
　そのうちに清明の節となった。防禦の家では女（むすめ）が新しく歿くなっているので、下男と興哥に留守をさして、皆で墓参に出かけて往った。
　興哥はその日は軽い心地になって、庭の中を歩いたり、下男と話をしたりした。陽が入ってうっすらと暮れかけた時、彼は小斎の前の壁にもたれて立っていた。二挺の肩輿（かご）が表門を入ってきた。興哥はあの後か前かに興娘の妹の慶娘（けいじょう）がいるだろうと思って、うっと

りとしてそれを見送っていた。と、後ろの肩輿の窓から小さな光るものが落ちた。興哥はそこへ歩いて往った。黄金の釵（かんざし）が落ちていた。蹲（しゃが）んで拾って空の明るみに透して見ると、鳳凰の形にこしらえた物であった。

興哥は、これはきっと慶娘の落したものだろうと思って、追っついて渡そうと思って往きかけると、もう肩輿は中門を入って、それと同時に門の扉がぴっしゃりと締った。

興哥は翌日下男から渡してもらおうと思って、その釵を持ったままで引返して、小斎の中へ入り、燈をつ

けて拾った釵をその光に見直した。そして、慶娘はどんな女になっているだろうと思った。興娘が四つか五つで慶娘は生れたばかりの赤ん坊であったことを、おぼろげに覚えている興哥は、時折慶娘に逢ってみたいと思うことがあっても、礼儀正しいそうした家では、遠くから透し見ることすらできないでいた。興哥の好奇心はやがて興娘の方へ往った。おぼろげに覚えている幼顔そのままの興娘の姿が微に思い出された。彼はまた悲しくなってきた。悲しみに捉えられた彼の前には、渓底を見るような微暗い前途が横たわってみえた。俺はこの先どうなるだろう、興娘が歿くなっているの

に、いつまでもここに厄介になっていることはできない。身を立てようと思ったところで、それもできるかどうか判らない、俺は何という不幸な男だろうと思った。彼は両手で額を押えて俯向いた。

入口の扉（と）をことことと叩く者があった。興哥は顔をあげた。

「どなた」

しかし、戸外（そと）では返事をしなかった。興哥は何人（たれ）だろうと思って考えた。と、またことことと扉を叩きだした。

「どなたです」

戸外ではまた返事をしなかった。興哥はがてんがゆかなかった。扉がまたことことと鳴った。
「どなたです、お入りなさい」
戸外では依然として返事をしない。興哥は不思議でたまらないので、起って往って扉を開けた。そこには若い綺麗な女が立っていた。興哥は驚いて眼を瞠った。
「あなたはどなたです」
「わたし、慶よ、さっき、肩輿の中から釵を落したのよ、あなた、あれを拾ってくだすって」
「拾ってあります、すぐ追っ駈けて往って、お渡ししようとしましたが、御門が締りましたから、朝お届け

しようと思いまして、持っております」

興哥は卓の傍へ往って釵を取ろうとした。慶娘は引き添うように随いて往って、興哥が釵を持って振り返った時には、二人の体はぴったり並んでいた。

「あなた」

釵を持って興哥の手首に慶娘は白い細そりした両手をかけた。興哥は当惑してしまった。

「お嬢さん、甚だなんでございますが、私はお父さんに大恩がございます、もしお父さんに、こうしている処を見られましたなら、申しわけのないことになります、どうか放してください」

興哥は俯向いたなりに言った。ふわりとした慶娘の手は放れなかった。

「私はお父さんに大恩があります、どうか私のために帰ってください」

「帰りませんよ、わたしをここへ連れてきたのは何人です、あなたじゃありませんか、わたしは帰りませんよ」

慶娘は不意に大きな声をしながら、興哥の手首を握った手に力を入れた。興哥はこんな声が聞えては大変だと思った。

「困りますよ、そんなことをおっしゃっては、お父さ

んの耳へ入ったら、大変じゃありませんか」
「でも、あなたが連れてきたのじゃありませんか、連れてきといて、帰れとはひどいじゃありませんか」
慶娘の声は一層大きくなった。
「そんな、そんな大きな声をされては困ります」
「それが困るなら、わたしと彼方へ参りましょう、お厭ならこれから帰って、あなたが、わたしを連れ出したと、お父さんに言いつけますわ」
興哥は女がなすがままになるより他に為方(しかた)がなかった。彼は女の詞(ことば)のままに次の室へ往った。

慶娘はその晩から夜になるときて朝早く帰って往った。その間に一ヶ月半位の時間が経った。

ある夜、平生（いつも）のように興哥の許へ忍んできた慶娘が囁いた。

「今日までは、何人にも知れずに済みましたが、このさき、どんなことで露われるか判りません、もしそんなことになると、お父さんはああいったような厳格な方だから、どんなに怒るか判りません、私は覚悟をきめておりますから、引き分けられて、一室に監禁せられても諦めますが、あなたの御身分にかかわりますから、二人でどこかへ往って、人の目に著かない処で、

静かに暮そうじゃありませんか」

「そうです、私もそう思っていたのですが、これという知己（しりあい）の者がなくて困っております、ただ私の家にもと使っていた金栄（きんえい）という男が、鎮江で百姓をしているということを父から聞いてますが、それは義理がたい男だそうですから、それでもたよって往ってみようじゃありませんか」

二人はその朝の五更の頃、そっと家を逃げだして、瓜州（かしゅう）から揚子江の流れを渡り、鎮江府の丹陽（たんよう）へ往って、目ざしている金栄の家のことを聞いてみるとすぐ判った。

金栄の家は甚だ富んでいて村の保正(ほしょう)をしていた。興哥と慶娘の二人はそれを尋ねて往った。
「あなた様は、何方様でございます」
金栄はもう興哥の幼顔を忘れていた。
「私は崔興哥じゃ」
金栄にはまだ判らないので、興哥は父の姓名から自分の幼名まで言った。
「それでは崔様の若旦那様じゃ、まあ、まあ、こんなに御成人なさいまして」
金栄は興哥を上へあげて大いに歓待した。そこで興哥は事情を話して、二人で厄介になることになったが、

金栄は旧主（きゅうしゅ）に仕えるようにして二人の面倒を見た。

二人はそれがために何の不自由もなく、一年ばかりの日を送ったが、その時になって慶娘は興哥に言った。

「お父さんとお母さんに知れるのが恐ろしかったから、こうしてきましたが、この頃、お父さんやお母さんのことが気になってたまりません、それに、お父さんやお母さんは、その当座は憤っていらしても、他に児（こども）はないし、帰ってあげたら、かえって悦んでくださるだろうと思いますが、あなたはどう思います」

興哥も慶娘と同じ考えを持っていた。二人は金栄に別れて揚州へ帰った。そして、舟が著いた時慶娘が

言った。

「二人がいっしょに行っては拙（まず）いじゃありませんか、私はここにおりますから、まずあなたが往って、お父さんに逢ってお父さんの容子を見てきてください」

興哥は一人で往くことにして舟をあがりかけると、慶娘が呼び返した。慶娘は懐から鳳凰の釵を出した。

「もし何かのことで疑われるといけませんから、これを持っていらっしゃい、証拠になりますから」

興哥は慶娘の言うなりになって、釵を持って舟をあがった。

興哥はおどおどしながら呉家の門を入った。そして、入口へ往って扉を叩いた。扉の音は興哥の耳に強く響いた。

扉が開いて知らん顔の取次が出てきた。

「私は興哥という者でございますが、御主人にお目にかかりとうございます」

取次の男は入って往った。興哥は恐ろしいものでも待つようにして取次の帰ってくるのを待っていた。すると内から防禦の声が聞えてきた。

「興哥さんか、よく帰ってきてくれた、わしの待遇がわるかったから、あんたもいるのが厭であったろう、

だが、よく帰ってきてくれた」

防禦はそう言い言い出てきた。興哥はそのまま地べたへ頭を擦りつけた。

「どうか今までの罪を、お許しを願います」

「あんたにはわるいことはない、わしは、あんたが黙って出て往ったから、わしの待遇がわるかったじゃないかと思って、心配しておった、よく帰ってきてくれた」

「誠に申しわけがありません、どうかお許しを願います」

興哥は顔をあげなかった。防禦は不審そうに言った。

「あんたは何か考え違いをしてるだろう、あんたには

何も罪はないじゃないか」
「そうおっしゃられると、私は穴にでも入りとうござ
います、私は、お嬢さんとあんなことになりまして、
二人で鎮江の方へ逃げておりましたが、お二人のこと
が気になりますので、お叱りは覚悟のうえで、帰って
参りました、どうか二人の罪をお許しください」
防禦は呆れて眼を瞠った。
「あんたは夢でも見ているのではないか、慶娘は一年
ばかりも病気で寝ておる、あんたは確かに夢を見てお
る」
「お家の恥辱になることですから、そうおっしゃるで

しょうけれども、夢でも作り事でもありません」
「そんなばかばかしいことはない、確かに女は寝てお
る」
「いや、お嬢さんは私といっしょに帰ってきて舟の中
に待っております」
「そんなばかばかしいことがあるものか、あんたはど
うかしておる、女は奥で寝ておる」
「でも舟におります」
こう言って興哥は体を起した。防禦は傍に立ってい
る取次を見た。
「船著場へ何人かやって、調べてこい」

取次は引込んで往ったが、間もなく出てきた。

「どうだ、調べさしたか」

「調べましたが、どの舟にもお嬢様の姿は見えないそうです、まさかそんなことはないでしょう」

「そうとも、慶娘は家におる、夢でも見ていなければ、何か為にすることがあって、そんな事を言ってるだろう」

防禦は怒ってしまった。興哥は女が証拠にと渡した釵の事を思い出した。

「決して私は嘘は申しません、嘘でない証拠には、これを御覧なすってください」

興哥は懐から釵を出して起ちあがった。防禦はそれを手に取って見た。

「これは興娘を葬った時に、棺の中へ入れたものだ、この釵はあんたの家から、許嫁の証に贈ってきたものじゃ、これがどうしてあんたの手に入ったろう」

防禦は考え込んだ。興哥も不思議でたまらないから防禦の考え込んだ顔へ目をやった。

若い女がつかつかと来た。防禦は顔をあげた。今まで奥の室に寝ていた病人の慶娘であった。

「お父さん、私は不幸にして、お父さんとお母さんとに別れましたが、興哥さんとの縁が尽きないものです

から、暫く夫婦になっておりました、これからは慶娘と興哥さんを夫婦にしてください、そうすれば、慶娘の病気もすぐ治ります」

こう言った慶娘の声も物腰も興娘そのままであった。

「お前の心情は察するが、何故、そんな人を驚かすようなことをする」

防禦は叱るように言った。

「興哥さんとの縁が尽きないものですから、一年の許しを受けて、興哥さんと夫婦になっておりました、どうか私の今のお願いを聞いてください」

「よし、では、慶娘と興哥さんをいっしょにして、こ

の家を譲ることにする」

慶娘は泣きだした。そして、興哥にすがりついた。

「あなたは慶娘を可愛がってやってください、でも、私も忘れないように」

慶娘は悲しそうに泣き入ったかと思うと、そこへ倒れてしまった。皆が驚いて介抱していると眼を開けた。慶娘の病気はその場かぎり治ってしまった。慶娘はその日、自分の言ったことも、したことも覚えていなかった。

防禦は日を選んで、興哥と慶娘を結婚さした。

興哥はかの釵を売って鈔金二十錠を得、その金で揚

州の城東にある后土廟へ往って、道士に頼んで三昼夜興娘の祭をした。

祭がすむと夢に興娘が出てきて、祭の礼を言い、慶娘のことを頼んだが、それからはもう不思議もなくなった。

底本：「中国の怪談（一）」河出文庫、河出書房新社
　　１９８７（昭和62）年５月６日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　　１９７０（昭和45）年発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年11月３日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。